

社会科におけるソクラテス・セミナーの活用

— 論争問題を協働的に解釈し、考えを深めるための指導法を求めて —

岩崎圭祐*

(2022年11月16日 受理)

Applying the Socratic Seminar in Social Studies : In Search of Instructional Strategies
for Collaborative Interpretation and Deepening Thinking about Controversial Issues

IWASAKI Keisuke

要約

本稿は、生徒が論争問題を協働的に解釈し、考えを深めるための指導法の一つとして、社会科における「ソクラテス・セミナー」(Socratic Seminar)を提案し、その意義と方法について米国の教育研究の成果や、中学校社会科公民的分野での活用事例の分析から検討するものである。

近年、主権者教育への関心や、価値の多様化や対立が深まっている社会状況を踏まえ、人々の間で意見が対立する社会的事象について話し合う「論争問題学習」が、社会科における重要な学習領域として認識されつつある。しかしながら、そのような学習が重要であるという認識は理解しているが、具体的に実践することができていないという教師も現状が明らかになってきている。

本稿では、はじめに、米国の論争問題学習の指導法として広く普及しているソクラテス・セミナーを取り上げ、その指導法を社会科で取り扱う意義と方法について明らかにした。その後、中学校公民的分野における授業実践をもとに、ソクラテス・セミナーの意義と実践上の留意点について検討した。その結果、ソクラテス・セミナーには、生徒が筋道を立てて話し合いを行うことができることや、生徒が生み出す問いが質的に向上するという意義がある一方で、教師は授業規範の確立や問いの設定と提示の仕方に留意すべきことが明らかになった。

キーワード：ソクラテス・セミナー、論争問題学習、議論、指導法、熟議

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 助教

I 問題の所在—論争問題学習を「何のために」「どのように」学ぶのか—

本研究は、生徒が論争問題を協働的に解釈し、考えを深めるための指導法の一つとして、社会科における「ソクラテス・セミナー」(Socratic Seminar)を提案し、その意義と方法について検討するものである。

人々の間で意見が対立する社会的事象について話し合う「論争問題学習」は、18歳選挙権の実現以降、社会科における重要な学習領域として認識されつつある。米国の社会科教育学者であるヘス(2021)は「子どもが学校外の世界に対して真正な政治的関与・参加ができるように準備する」ための教育法として「論争問題学習」を提示し、その利点として①異なる意見を持つ立場の人々を理解しようとする寛容性を高めること、②話し合っている社会問題自体への深い理解を促すこと、③政治参加や社会参画を促すという3点を挙げている。社会には異なる利害や価値観を持つ人々があり、その人々との意見の相違を調整し、納得する枠組みを作ることが政治とされるが、グローバル化や資本主義の進展にともない、価値の多様化や対立は深まっている(宇野, 2018)。そのような社会的背景を踏まえると、それに対応する教育として、今後ますます「論争問題学習」の必要性は高まっていくだろう。

しかし、実際に教師は論争問題学習に取り組んでいるのだろうか。文部科学省(2020)の調査では、「現実の政治的事象についての話し合い活動」に取り組む学校が34.4%にとどまっている。また、吉田(2022)は、九州・中四国地方の公民科教師を対象とした調査から、多くの教師が授業で論争問題を扱うことの意義を認識しているものの、自分の指導能力では、その問題を扱うことができないと感じているため、教師が論争問題学習を避けていると、「論争問題を扱う上での自己効力感」の低さを指摘している。この点を踏まえると、論争問題学習を「どのように指導すればよいか」という具体的な指導法を提唱し、実践可能性を高める試みが重要であると考えられる。

そこで、本研究では米国の論争問題学習の指導法として広く普及している「ソクラテス・セミナー」を取り上げ、その指導法を社会科で取り扱う意義と方法について明らかにする。その上で、中学校公民的分野においてソクラテス・セミナーを実施した授業事例を示し、教師の活用プロセスを検討することで、その教育的意義や実践上の課題について示すこととする。

II 日本における論争問題学習研究の展開—議論の指導法に焦点を当てて—

日本における論争問題学習と指導法の展開について、その特質と課題について明らかにする。論争問題学習の研究展開について、川口・奥村・玉井(2020)は、日本の社会科教育系論文に見られる傾向を明らかにし、その特質を、①当初はアメリカの研究からの借用が主であるが、21世紀に入りイギリス研究の成果が取り上げられるようになったこと、②全体としては、規範・原理研究が主であったが、開発・実践研究や実証・経験研究の蓄積も近年増え、目標や方法論も多様化してき

ていること、③ 借用される論文にも傾向があることの3点にまとめている。しかし、論争問題の議論をどのように指導するかという点から先行研究を読み解いた場合、その蓄積は限られている。

論争問題の議論をどのように指導するかについて先駆的に取り組んだ研究として、尾原康光の一連の研究が挙げられる。尾原（1991）は、社会科授業における価値判断の指導について、「トゥールミン図式」を活用して価値判断の構造分析を行い、価値判断を伴う授業においては、「事実的言明」、「規範的言明」、「評価的言明」の検討が不可欠であることを示した。また、尾原（1992）においては、従来の社会科教育研究では、批判的思考の構造や過程が原理的に考察されることはあっても、カリキュラム・単元・授業の構成をどうするかといった実践的なレベルの問題まで射程に入れた考察はなかったことを問題意識とし、オレイリーが開発したプログラム『アメリカ史における批判的思考』の批判的思考育成原理と方法を解明している。特に尾原（1991）によって提示された「トゥールミン図式」については、その後の社会科教育研究の中で様々な研究者によって適用、改良がなされるとともに、その活用方法について今日まで議論が行われており、話し合いの際に意見の相違や調整を行う枠組みとして有効性が示されてきている。

しかし、近年では論争問題学習の学習原理を解明し、それに基づく実践や指導方略を研究するアプローチも見られる。渡部（2022）は、D・W・オリバーやJ・P・シェーバーが開発した「ハーバード法理学アプローチ」の授業構成原理を明らかにし、現職の教師とともに授業実践化に取り組み、実践の中で見られた教師の行為や生徒の反応について検討を行っている。渡部（2022）は、これまでの社会科教育研究が行なってきた諸外国で示されたカリキュラムの分析やそれに基づく授業構成原理の考案を超えて、授業構成原理の実用化に向けての取り組みを進めている。具体的な教室での実用過程を踏まえて、その学習原理の妥当性や効果的な実践方法を検討するアプローチは重要であり、本研究においても参考になることが多い。

一方で、米国で実践される「論争問題学習」の諸形態は、「ハーバード法理学アプローチ」以外にも存在する。例えば、米国の著名な社会科教育研究者のW・C・パーカー（2003）は2000年代前半より、論争問題学習に効果的に取り組む手法として「ソクラテス・セミナー」と「構造化された学究的論争問題学習（Structured Academic Controversy）」を提唱している。また、それらの手法は様々な研究の中で具体化され指導法として確立してきている（Kohlmeier, 2022）。そこで、本研究では、論争問題学習における指導法の一つである「ソクラテス・セミナー」に注目し、その目的や実践方法について明らかにする。

Ⅲ ソクラテス・セミナーの意義と方法—米国の論争問題学習研究を事例として—

1. なぜソクラテス・セミナーに注目するのか

ソクラテス・セミナーの意義や指導法について詳説する前に、なぜソクラテス・セミナーを取り上げるのかについて簡潔に示したい。その理由としては2点ある。

第一に、ソクラテス・セミナーは社会科の指導だけでなく、言語教育を含む様々な分野で研究が進んでおり、実用可能性が高い指導法として確立されているからである。ソクラテス・セミナーはM.J.アドラーが中心となって実践した「グレート・ブックス・セミナー」が原型となっている(Parker, 2003)。アドラーはコロンビア大学のR.M.ハッチンスの協力のもと「グレートブックス運動」を展開し、「グレート・ブックス・セミナー」は1940年代前半から60年代半ばにかけて急速に普及している。また、その普及過程においては、大学教育だけでなく、小学校や高等学校を含むすべての年齢向けにも組織されていったようである(松田・江藤・須賀, 1999)。社会科において実践されているソクラテス・セミナーも、基本的なセミナーの構成要素をグレート・ブックス・セミナーより取り入れていることから、学習の展開例やセミナーの規範、良いセミナーの特徴などについては、一定の形式が存在する。授業の形式やその授業に取り組むための方法が豊富であるソクラテス・セミナーを活用することで、論争問題を議論する授業の実現可能性を高めると考えた。また、同様の学習形式を複数回繰り返すことで、論争問題を話し合う意味や適切な振る舞いを学習者が効果的に学ぶことにつながるとされるという点も考慮した(Parker, 2018)。

第二に、論争問題学習の初学者に対しては、論争について話し合い、一定の合意を目指す熟議的なアプローチや議論そのものを競うディベートのような学習だけでなく、その問題自体の理解を深めることを目的とする学習が必要であると考えたからである。近年、米国では、議論の形式が生徒の意見形成にどのような影響を与えるのかについての研究が進み、① 熟議を促す議論において、生徒は協調的な姿勢を見せ、生徒の意見がより一致する傾向になるものの、参加者の中で理解度にバラツキが出やすく、② ディベートは均等な参加を促す一方で、意見の対立を先鋭化してしまうことが明らかにされている(MacAvoy & Lowery, 2022)。このように、教師が選択する議論の形式によって、生徒の意見形成や起こりうる議論も変わっていくことを踏まえると、ソクラテス・セミナーには熟議やディベートとは異なる独自の利点があるように思われる。

パーカー(2003)は熟議とセミナーの違いについて、表1のように示している。セミナーは学習内容についての共通の行動や指針を定めていく熟議とは異なり、参加者が教材(テキスト)の内容を深く理解することに重きが置かれている。論争問題学習における授業構成では、熟議か闘技(ディベート)かといった最終的なゴールが目指されるが、本来論争問題について考える上では、その論争問題に付随する様々な問題について検討する必要がある。この点を踏まえれば、特に、議論の経験が少ない生徒に対しては、その問題についての理解を様々な角度から深めることを目的とするソクラテス・セミナーが論争問題を考える上では有効な教育手法となりうるのではないだろうか。なお、セミナーと熟議は相反する教育方法ではなく補完的なものであり、実践によってはソクラテス・セミナーを行なった後に、その判決についてグループ内で意思決定を行う事例も見られる(Kohlmeier, 2022)。

このように、① 授業の型や様々なツールが数多く存在し、実践可能性が高い教育方法であること、② 熟議やディベートとは異なる目的で論争問題の理解を深めるという独自の利点があるという

ことからソクラテス・セミナーに注目することとした。

表 1：セミナーと熟議の違い

諸側面	セミナー	熟議
目的	1. 魅力的なテキストを深く理解する 2. 生徒の理解力を向上させる	1. 学習した問題について「私たち」は何をすべきかを決断できる 2. 生徒の理解力を向上させる
主題	考え、問題、価値を含むプリントや映像資料、芸術作品、パフォーマンス、政治、政治的な風刺画や文章	公共的な問題に対する代替的な行動（政策）方針
冒頭の問い	これはどんな意味か？	私たちは何をすべきか？
典型例	ソクラテス・セミナー	構造化された学究的論争問題学習（SAC）

(Parker, 2003 より筆者作成)

2. ソクラテス・セミナーの目的

先述のように、ソクラテス・セミナーは、複雑なテキストに対するグループの理解を深めるために生徒の協働的な取り組みを促進させることを目的としている。ここでいうテキストとは、幅広く豊かな解釈を生み出す文章であり、印刷物(手紙、最高裁判所の判例など)や視覚的なもの(記念碑、映像、絵画)、聴覚的なもの(労働者の歌、国歌)、演劇(演劇やミュージカルの1シーン)など様々なものを指す(Parker, 2003)。ソクラテス・セミナーの中心的な目的は、説得や決定ではなく、テキストの中の考えに対するグループの理解を深めることであり、その普及に尽力したグレイはセミナーの特徴について次のように述べている。

セミナーでは、単なる情報の羅列するのではなく、参加者全員がしっかりと考えることが要求されます。どのような理解を深めるか、どのような道筋をたどるかをあらかじめ決めておく必要はないのです。また、セミナーは、「授業計画」という堅苦しいものではなく、参加者の発言によって話が進んでいくものです。特に、複雑で多面的な事柄について批判的に考えることを主な目的としているため、セミナーでは正解を競うことはありません。その代わりに、参加者同士が協力し合って理解を深め、テキストへの反応を互いに確かめ合うのです。(Gray,1989:18)

以上のことからセミナーは、グループでの合意や政策決定を目的としていない。ある一つのテキストの意味を生徒の発言を中心にして共同で解釈することで、その問題について真剣に考えることができ、一人で行うよりも幅広い解釈や理解を生み出すことを大切にする教育方法といえよう。

3. 「法理学的アプローチ」との相違

ソクラテス・セミナーの実践方法を紹介する前に、渡部が実践化を進めてきた「法理学的アプローチ」との相違について付け加えておきたい。第一に、法理学的アプローチとソクラテス・セミナーには共通する点が多い。ヘス(2021)で紹介されている法理学的アプローチを用いる教師の授業が「セミナー」と呼ばれており、近年のソクラテス・セミナーを用いたコールメイヤーとセイ(2019)の研究においても、法理学的アプローチの中で重要とされている「アナロジー」が効果的な問いとして想定されていることから、同一の教育方法と考えることもできるかもしれない。

一方で、ソクラテス・セミナーは、法理的な視点を持たない広範な学習を保証する。例えば、ベック(2022)は小学校でのソクラテス・セミナーの実践例として「ジャックと豆の木」の事例を紹介している。「なぜジャックは変な顔の老人を信用しようとしたのでしょうか？それは良い考えだったのでしょうか？」という問いのもとで、民主主義社会において検討すべき価値である「信頼」について検討している。発達段階なども考慮されていると思うが、この授業においては「信頼」という言葉の意味を、物語教材を用いて解釈し深めることが主となっている。このことを踏まえると、ソクラテス・セミナーは扱う教材や目的や学年段階に応じて、幅広く問いを変え実践できる適用範囲の広い教育法ともいえるだろう。しかしながら、論争問題学習に取り組む際にどちらのアプローチをより重視すべきかというのは現段階では判断できない。ソクラテス・セミナーもその議論の質的な高まりを求めていけば、「法理学的アプローチ」を一つの見方として取っていく場合もある。この点については授業実践とその指導の改善プロセスを追っていく中で検討していきたい。

4. ソクラテス・セミナーの実践方法

一般的なソクラテス・セミナーの方法は、①参加者が輪になって座る、②誰も手を挙げず、お互いに直接話す、③参加者は、テキストを参照したり、テキストの一節を示したりすることで、自分の解釈を裏付けることを求めるというものである(Kohlmeier, 2022)。しかし、図1に示すように、話し合いの形式やグルーピングに関しては、教師も含めたクラス全員が一つの円になる「全体型」、観察者で作る大きな円の中に、話し合いの参加者が小さな円を作る「フィッシュボウル」型、少人数で作る円を複数作る「少グループ型」と様々であり、教室の状況や授業の目的に応じて変化させているようである(Parker, 2003)。ソクラテス・セミナーの授業構成としても、その実践者によって若干の違いはあるが、その共通項をまとめると次のようになる。

(1) セミナーの準備

一般的に「チケット」と呼ばれる配布資料を事前に配り、生徒はセミナーの開始前までにチケットを完成させ、教師に提出する。チケットでは、主題となるテキストを読み、重要な部分や理解できない部分に下線を引いたり、テキストを読んで感じた疑問や自分の考えを記入させたりする。場合によっては、テキスト内で示された語句や事象の意味について調べ、記入することもある。ソクラテス・セミナーを本格的に行う授業の前段階で行うことが望ましい。

(2) セミナーの目的やルールの説明

セミナーを行うことができるように机の移動や掲示物など教室を整備したのち、セミナーの目的やルールについて説明する。目的やルールについては視覚化された形で掲示するとよい。

(3) セミナーの実践

教師または生徒が議論する問題についての「はじまりの問い (opening question)」を投げかけることでセミナーを開始する。「はじまりの問い」は、生徒が話し合いに参加したいと思い、テキストに基づいて発言できるような正解のない複数の解釈を生む問いであることが望ましい。また、セミナーの前半では、その問題について直接的な評価を求める話し合いではなく、そのテキストが持つ複数の解釈を理解することに重きが置かれることから、冒頭の問いは「～とはどういう意味だろうか」「～とは…どのように区別されるだろうか」というような解釈に関わる問いが望ましい。

セミナーの実践中は、生徒同士で話し合いを進めることが奨励され、教師はできるだけ発言をしないことが求められる。しかし、テキストに基づかない発言や議論が脇道にそれた場合には教師が介入し、問いを投げかけることも必要である。アナロジーを投げかけるなど生徒同士の話し合いでは出てこなかった新たな論点を提起することもある。また、生徒の発言を促すために発言の仕方を共有したり、話し合いを評価するための指標を提示したりすることなど、セミナーが円滑に進むための支援を行うことも教師の重要な役割とされる。

(4) セミナーのまとめ

セミナーのまとめでは、話し合い自体の評価を参加者同士で行う。生徒たちは、セミナーの目的が達成されたかどうかや、発言の仕方や内容について振り返り、次のセミナーに生かすようにする。一般的には、セミナーの観察者を設定し発言者のマップを作成させ、そのマップを共有することで話し合い自体を評価し合うことも有効であるとされている。

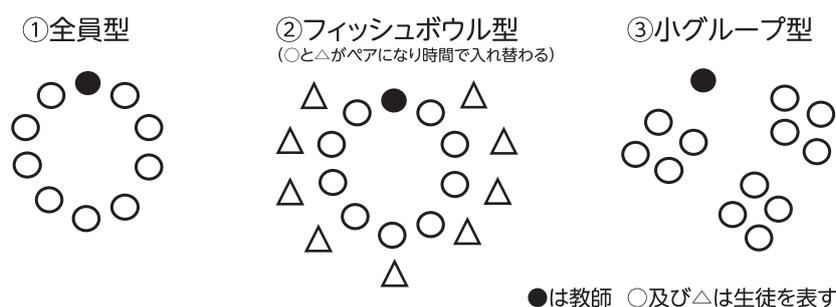


図1：ソクラテス・セミナーの諸形態 (筆者作成)

5. ソクラテス・セミナーの効果的な指導のポイント

ここまで、ソクラテス・セミナーの目的やその手順について紹介してきた。それでは、有意義なソクラテス・セミナーを実践していくために、教師に求められる効果的な指導のポイントは何か。この点についても、米国の研究に基づいて次の3点を示したい。

(1) 魅力的 (Powerful) なテキストを選ぶ

第一に、読み手に様々な解釈を想像させ、生徒同士の価値観の違いを顕在化させるような魅力的なテキストを選ぶことである。パーカーは魅力的なテキストとは何かについて以下のように述べている。

テキストの中に参加者の考え、関心、価値観を揺さぶり、自由にするものが含まれ、それが参加者を刺激するようなものが「魅力的」なテキストといえます。これらのテキストは、人間の根源的な問題や考えてもいない問題を提起し、相反する解釈や読む人の心を揺さぶる可能性のあるものです。また、テキストに対する解釈を交換し合い、意味を解明することは、参加者の知性と道徳心を刺激するものであり、参加者が多様で参加者間の意見が違えば、より参加者の視野を広げることができるはずですが。このテキストによって引き出される考え、関心、価値観は、私たちが誰であり、共にどのように生きるのか。なぜ憎んだり、愛し合ったりするのか。なぜ苦しんだり、希望持ったりするのか。また、私たちが何を作り上げようとし、何を作り上げようとししないのかということと密接に関係しているのです。(Parker,2003:135)

また、ソクラテス・セミナーでは、通常、テキストを抜粋して提示する。たいてい、授業で扱う際にはその文章の一節に焦点を当てることで、より深く理解できる。一節にまとめることで、狭い範囲に集中して取り組むことができ、その結果、多くの生徒が内容について理解することが可能になる。

(2) 事前にテキストから引き出される問いを想定する

魅力的なテキストを選ぶことと同時に、そのテキストから引き出される問いを教師が想定し、どの問いを授業で取り上げるのか慎重に検討することは、ソクラテス・セミナーを成功させるための鍵となる。そのため、ソクラテス・セミナーを始める前に、教師は使用するテキストから引き出される問いをあらかじめ準備し、チケットで記入された生徒の疑問や反応を踏まえて、セミナーで中心となる問いを決める必要がある。ここでは、コールメイヤーらによって作成された小単元「忠誠の誓い」において教師が考えた問いについて検討する (Kohlmeier, 2022)。

授業の主題として設定されている「忠誠の誓い」は、アメリカ合衆国内において愛国心教育の一環で、公立学校における国旗に対する忠誠の誓いとして行われている儀式である。合衆国の生徒は「私はアメリカ合衆国の国旗と、神の下で、すべての人に自由と正義をもたらす、ひとつの分かつことのできない国である共和国に忠誠を誓う」という誓約文を暗唱することが求められている。この点に対して、合衆国内ではこの国旗への忠誠を誓うことが、国教樹立を禁止するアメリカ合衆国憲法修正第1条、信教の自由に関する修正第14条に違反するかについて長い間論争が行われてきた (新田, 2004)。そこで、「忠誠の誓い」に関するソクラテス・セミナーでは、誓約文の意味や解釈を話し合いによって深める形をとっている。

コールメイヤーらは、教材化の過程において、「忠誠の誓い」から資料1の問いを考案した。ここに示されている問いは一例であるが、合計で54個の質問が計画されている。その中には、ある一定の答えが存在する事実を問う質問（「神の下で」という文言はなぜ冷戦後に付け加えられたか？）というものから、国家や共和国の定義を考える解釈的な質問（国家とは何なのか?）、「あなたは何に忠誠を誓うのか」といった価値的な質問まで多様な質問が準備されている。また、このセミナーでの問いとしては唯一、国家について高校のアナロジーが準備されている。実際にこれらの問いを全て活用するものではないが、事前に問いを検討することにより、セミナーの冒頭や話し合いの中で投げかける問いの質が高まるため、この過程を入念に行うことが重要である。「忠誠の誓い」のセミナーでは、これらの問いの中から、①誓いを立てるとき、あなたは何に対して誓うか?②「神の下で」という言葉が誓約にあることについてどう思うか?③「すべての人に自由と正義を」という言葉は、説明的なものか、それとも願望的なものか?という問いを中心的な質問として設定している。

また、事前に問いを検討し設定することは、生徒中心のソクラテス・セミナーを展開する上でも有効なようである。シュミットとピンクニー（2022）は、生徒同士の話し合いやファシリテーションを促す上で、生徒に問いを示し、生徒がその問いに優先順位をつけて話し合うことを提案し、ソクラテス・セミナーに問いづくりの実践「QFT(Question Formulation Technique)」(ロスステイン・サンタナ, 2015)を取り入れることを提案している。そこでは、チケットを配った後に、小グループでブレインストーミングを行い、主題について考えるべき問いをリストに書き出す。その後、「最も良い」、「最も重要な」問いを選び、その問いについて再度テキストに戻って考えることが推奨されている。セミナーの中で何を話すべきかについて、教師だけでなく、生徒が問いを見極めて優先順位をつけることで、主題についてどのような視点から、どのような手続きで問題に迫っていくか考える力を身につけることができるだろう。

資料1：事前に考えた「忠誠の誓い」ディスカッションガイド（一例）

<p>「忠誠」</p> <ul style="list-style-type: none"> • 忠誠をどのように定義する？(忠義、誇り、犠牲、感情、献身) • 忠誠とは、抗議をあきらめることなのか？ • 忠誠を誓うとき、あなたは何に忠誠を誓うのか？ <p>「国旗」</p> <ul style="list-style-type: none"> • 国旗は何を象徴しているのか？ • なぜ、国旗があるのか？ <p>「共和国」</p> <ul style="list-style-type: none"> • 共和国とは何か？ • 私たちの共和国は、他の共和国(例えば、中華人民共和国)とどう違うのか？ • 人が誓いの言葉を言うとき、歴史的な出来事や時代、現代のアメリカ独立戦争や建国の父たち、あるいは今日の共和国を思い浮かべているのだろうか。 <p>「国家」</p> <ul style="list-style-type: none"> • 国家とは「何」なのか?そうでないものは何なのか? 物理的な境界線なのか、それとも別のものなのか? • 統一とは何か? 国家に統一は必要なのか? それは望ましいか(長所/短所)? • 学校の一員でありながら、仲間や学校がすることすべてに全面的に賛成することはできるか? 全員が同意することを望むか?(高校のアナロジー) <p>「正義」</p> <ul style="list-style-type: none"> • その定義を参照しよう。正義は罰か? 法の支配? 復讐か? 被告人の権利? • 共和国にとって重要なものは、どのような正義なのでしょう? • 正義のどのような点が達成されていないと感じますか?

(Kohlmeier, 2022 より筆者作成)

(3) セミナーのための環境を整える

ソクラテス・セミナーに向けてのテキストや中心的な問いが出来上がると、セミナーをどのように取りませせるのかについて指導することが必要となる。ここでは、その実践的な指導法について「セミナーの規範の確立」、「発言例 (stem) による支援」の2点を取り上げる。

論争問題の議論に取り組もうとする多くの教師が懸念していることに「論争問題を扱った時に、生徒から不寛容な発言が出てきた時や敏感な問題に反応して口論になった場合にはどうすればよいか」というものがある (Pace, 2021)。また、教師と一部の生徒のみが盛んに発言し、他の生徒は黙っているという場面も議論学習の望ましくない実践例としてしばしば挙げられる。生徒同士が話し合いを進めることが理想的ではある。しかし、そこに教師の介入が不必要であるというわけではない。教師は話し合いを前進させるために問いを投げかけるだけでなく、学習のルールや規範を確立させる必要がある。資料2は、良いソクラテス・セミナーについて、米国の教師が生徒に提示する資料の一例である (Larson, 2017)。生徒は、セミナーに取り組む前や振り返りの場面において、資料2を確認し、それを基準にセミナーを実施、評価する。望ましいソクラテス・セミナーについての方向付けは全ての生徒の意見が聞かれ、話し合われるために重要である。

資料2：良いソクラテス・セミナーの基準例

本当に素晴らしいソクラテス・セミナーとはどのようなものか？

- ①全員が指定されたテキストを読み、マーカーで線を引いて、授業の準備ができています。
テキストを読み、マーカーで線を引いたか？ 何か言いたいことがあるか？
- ②ほとんど生徒が話し、考えている。
セミナー中はマンスフィールド先生より働いているか？
- ③生徒同士で話している。
他の人の発言に反応しているか、自分の発言の順番を待っているだけか？
- ④セミナーでは、指定されたテキストに焦点を当てた話し合いができています。
私のコメントや質問は、すべて本文が中心になっているのでしょうか？
- ⑤生徒同士が質問し合っている。
*行き詰まったときに生徒に助けを求めているか？
今すぐには調べられない、答えられないような質問をしていないか？*
- ⑥学生は推測を避け、推測には敬意をもって挑みます。
*自分の考えをテキストからの証拠で裏付けるようにしているか？
他の生徒の発言に対して裏付けを丁寧に求めているか？*
- ⑦生徒は、他の人が本時（今日）の目標を達成しようと協力している。
*今日の目標が何であるか知っているか？
私は他の人が今日の目標を達成するのを助けているだろうか？*
- ⑧生徒たちは、テキストやホワイトボード、大きな紙、ワードウォールスリップ、自分のノートなどにたくさん書き込んでいます。
文章から意味を見出すために、目的を持って書いているか？
- ⑨振り返りは、その日のセミナーの目標に焦点を当てて誠実に行われている。
*セミナーの目標は達成できているのか？
目標を達成したことを示すものは何ですか？*

(Larson, 2017 より筆者作成)

一方で、話し合うための適切な雰囲気が示されたとしても、どのように発言してよいか分からなければ、発言は生まれません。特に、論争問題についての話し合いは、普段の会話とは異なる形式で

話す必要がある。そのため、発言が苦手な生徒にとって、ソクラテス・セミナーはより難しいものとなりうる。そこで、教師は適切に発言をするための「発言例 (stem)」を提供し、発言を支援していくことが大切である。表3は、米国の歴史教育団体 Facing History and Ourselves が作成した、ソクラテス・セミナーの発言例である。教師は発言例を用いて発言を促すとともに、良い発言例をモデル化するなどして、多様な生徒がセミナーに参加できるように働きかけるべきだろう。

表3：ソクラテス・セミナーのための発言例

賛成／反対	同じような…という考えの人はいますか？ …と異なる考えの人はいますか？
明確化	…という私の理解は間違っていますか？ …についてもっと教えてくださいませんか？
補足	…の例を示すことができますか？ …の根拠はどこですか？
原因／結果	なぜ、そのようなことが起こったと思いますか？ どうしたらそれを防ぐことができたと思いますか？
比較／対照	…とはどこが似ていて、どこが異なりますか？
利点／負担	これが良い（または良くない）意見である理由にはどんなものがありますか？ どなたか反対側の意見を聞かせてください。
視点／観点	その時、彼／彼女は何を考えていたと思いますか？ Aは違う意見を述べました。他の人はいますか？ あなたは違う解釈をしていますか？
構造／機能	それが目的だった場合、あなたは（その行動や反応について）どう思いますか？ 彼／彼女はどんな良い選択をすることができたのでしょうか？
判例	もし…なら、それはまだ起こるのでしょうか？ 何が違いを生んだのでしょうか？
異なる状況	あなたは、…になるような状況を説明できますか？

(Facing History and Ourselves の Web サイト https://www.facinghistory.org/sites/default/files/2022-06/Socratic_Seminar_Stems.pdf。(最終閲覧日 2022/10/31)より筆者作成)

IV ソクラテス・セミナーの実践-中学校公民的分野「参議院はくじ引きで」を事例に-

ここまで、論争問題を協働的に解釈し、理解を深めるための指導法としてソクラテス・セミナーについて紹介し、その実践化に向けて、セミナーの目的や指導上のポイントについて示してきた。本節では、これらの視点を踏まえて、中学校公民的分野における授業実践事例（「参議院はくじ引きで」）を事例に、その授業展開と実践上の留意点について明らかにしたい。

1. 授業展開と教師の指導

本授業は、中学校第3学年の公民的分野における政治単元での実践である。授業者であるX教諭

(α県内の公立中学校勤務)と協議の上、投げ入れ的な教材ではなく、カリキュラムの中で実践することを意識し、60分間(前時の10分と本時の50分)で完結する授業展開を組織した。また、通常のソクラテス・セミナーでは、全員型やフィッシュボウル型で行う場合が多いが、全体でのセミナーを組織することは教員・生徒両方に負担が大きいと考え、小グループ型で実施した。なお、本実践を行う前段階において、「死刑制度」(第一回)、「Twitter 削除訴訟」(第二回)を題材にソクラテス・セミナーを実施しており、本実践は3回目の授業となる。筆者とX教諭はそれぞれのセミナーを実施前、実施後に検討会を行い、その形態や問いの設定、問いの提示の仕方について修正を行っている。以下では、表4に示すX教諭が実施したソクラテス・セミナーの展開に即して「参議院はくじ引きで」の授業内容について説明する。

表4：ソクラテス・セミナー「参議院はくじ引きで」の展開(X教諭の事例)

段階	構成要素	時間配分	具体的な内容
(1) チケットの提示	チケットの提示	前時：10分	チケットを配布し、生徒がテキストに対すると問いや意見を書く
(2) 問いの整理	問いの整理		生徒の問いを踏まえて問いを整理し、ワークシートを作成する
(3) セミナーの準備	チケットの確認 資料の配布	10分	テキストの内容と自分の意見を再確認する 新しい資料1、2を配布し読み合わせる
	セミナーの説明	5分	セミナーの目的や留意点を確認する 自分の意見と関係がある質問、自分の意見が揺さぶられる質問を1つずつ選ぶ
	セミナーの準備	5分	グループの確認、グループ内で司会者を決める
(4) セミナーの実施	セミナーの実施①	5分	グループ内でメンバーの意見を共有する レベル1の問いを確認する
	セミナーの実施②	10分	レベル2の問いの中で、話し合う問いを選択し検討する
	セミナーの実施③	10分	レベル3の問いの中で、話し合う問いを選択し検討する
	最終意見の記入	5分	話し合いを踏まえて、主題に対して自分が考えたことについて書く

(筆者作成)

第一に「チケットの提示」である。近年、投票率が低下し、代表制民主主義が機能不全に陥っているという見方から「くじ引き民主主義(ロトクラシー)」に注目が集まっている(吉田,2021)。桑原・岩崎(2021)では、中学校公民的分野の「選挙」に対する見方・考え方の育成を図るために、被選挙権年齢引き下げの是非を事例として、「どのような人が候補者として望ましいか」に対する考え方が人によって異なることを気付かせようとしている。民主主義社会において誰が「代表」となるにふさわしいのかについての議論することは生徒の社会的な見方・考え方を育てることに有効であるといえよう。この点を踏まえて、「『くじ引き』で選ばれた議員は本当に『代表』といえるのか」について話し合うことを通して、生徒の「選挙」や「民主主義」への理解を深めようとした。そこで、巻末資料1に示した「参議員議員はくじ引きで 『多様性ある国会への切り札』：政治学者の提案」(朝日新聞デジタル,2022年7月1日)を抜粋・教材化した上で、チケットとして提示した。記事の中では、運用のためには憲法改正が必要になる可能性があるといった点やくじ引き民主主義の起源なども言及されているが、生徒に提示するチケットにはくじ引き民主主義がなぜ必要なのかについての岡崎晴輝氏の意見に絞って編集した。生徒はテキストを読み、「参議院議員はくじ引きで」に

対する自分の考えと、この問題について自分が持った疑問や深めたい問いをチケットに記入した。この段階では、34名の生徒のうち、賛成21名（留保条件付き5名）、反対8名、どちらとも言えない0名、無記入1名、欠席2名であった。

第二に、「問いの整理」である。X教諭はチケットを生徒から回収し、生徒がどのようなことを知る必要があると感じているのか把握した（表5）。生徒からは、実際に運用する場合に検討すべき事項（「法律」「対象」「拒否権」）に関わる問いや、参議院をくじ引きにすることで生まれる「効果」や「良識の府」として本当に機能するのかといった、生徒が判断を下す上で必要な価値的な問いが出された。この問いを踏まえて、X教師は資料3に示すワークシートを作成した。

表5：チケットに記された生徒の疑問

法律	本当に法律を作ることができるのか
対象	何歳以上の人を選ぶのか
	国民は全員その抽選に参加させられるのか（例外はあるのか）
	どの程度の範囲の人を抽選対象とするのか
	もし、男女がどちらかに偏った場合、どうするのか
拒否権	政治的な知識が少ない人はどんな意見を持っているのか
	くじ引きで当たった人に拒否権はあるか
効果	政治についてあまり知らない人がくじ引きで当たってしまったら、市民側の考えなど出すことができないのではないのか
	みんなの意見をしっかり聞けるようになるのか
	国民がみんな国会について知って、どうするのか
良識の府	「良識の府」とは何か
	「政党執行部に付度（そんたく）する」の意味が分からない
	本当に中高年の男性が社会の刷新を妨げているのか
	選挙で選ばれた議員は本当に自身の良心に従って判断できないのか
	本当に「良識の府」の名にふさわしい議院に近づくのか

（筆者作成）

ワークシートの上部には、ソクラテス・セミナーの目的、学習活動の目標、話し合いの進め方についての簡潔に示している。特に、これまでのセミナーにおいて「他者を説得するような発言」、「班員全員で意見を統一するような行動」が見られたため、「異なる主張があることを受け入れ、他者を説得することが目的にならないようにしましょう。班で統一する必要はありません」ということを強調して示していた。

ワークシートの下部には、ソクラテス・セミナーを行う上での問いを設定した。ここでは、「テキスト」の理解を深めながら、自分自身の考えを深めるというセミナーの趣旨を踏まえ、レベル1：テキスト内の語句の意味を再確認する問い、レベル2：テキストや他の資料を利用しながら主題についての理解を深める問い、レベル3：主題についての判断を迫る問いに分けている。また、問いはレベル1→レベル2→レベル3へと段階的に移行することで、共通の理解や前提を作った上で、最終的な判断ができるよう工夫している。

第三に、セミナーの準備である。セミナーを実施する前にチケットを返却し、テキストとチケットをもう一度読むことで、「参議院をくじ引きで」に対する自分の考えを確認させた。また、セミナーの問いに答えるためのヒントとして、新たな資料（資料A：海外の事例を紹介する新聞記事、資

料B：くじ引き民主主義を批判する政治学者の考え）を配布し、資料の内容について読み合わせを行った。次にワークシートを配布し、セミナーの目的や、話し合いを実施する上での留意事項を確認した。ここで、生徒が提出したチケットを踏まえた10個の問いを提示し、「自分の意見と関係がある質問」、「自分の意見が揺さぶられそうな質問」を一つずつ選ばせ、その問いをベースに話し合うよう促した。最後に、4～5人1組でグループ分けを行い、それぞれのグループで話し合い司会者を1名選ばせた。

資料3 X教諭が作成したソクラテス・セミナーのワークシート(一部抜粋)

☆ソクラテス・セミナーとは…ある課題に対して、テキストや資料を読み解きながら理解を深めることで、聞く力と話す力、物事を考える力を養う授業です。

本時の問い 「参議院議員を抽選制で選ぶことで多様性のある議会をつくる」という政治学者の提案についてどのように考えますか。	
学習活動目標 □ あなたの主張や言葉の定義、他者の発言に対しての疑問などについての答えを自分から発言しましょう。 □ 他者の発言をよく聞き、グループが今何を話しているのか理解して発言しましょう。	
話し合いの進め方 □ 前時に考えたポイントをはじめに共有しましょう。そこで出された意見とつながる問いや深める問いを選んで、グループで議論をしましょう。 □ 異なる主張があることを受け入れ、他者を説得することが目的にならないようにしましょう。班で意見を統一する必要はありません。 □ 班員の意見で重要だと思ったことや、自分の意見と異なると思ったことをメモしましょう。	
質問項目 あなたが前時で考えたことを揺さぶる問いの番号は→ ()	
レベル1	資料の言葉や内容について、分からない、不明確なことがある場合は初めに確認しましょう。 ・～ってどういう意味？ ・■■■■の具体例は、例えば○○○ということ？
レベル2 (分析)	①実際にくじ引き制を導入した議会を行った事例で、良い結果だと思われるのはどんな点か。(資料A) ②くじ引き制に反対する政治学者の意見の要点はどのような点か。(資料B) ③岡崎氏は、現在の国会や参議院の問題点は何であると考えているか。 ④くじ引き制の市民院の導入で懸念される問題点はどのようなものか(資料B)。 ⑤実際にくじ引き制を導入した議会では、知識の乏しい市民がどうやって議論したのか。(資料A)
レベル3 (評価・創造)	⑥「くじ引きは多様性のある国会を作る切り札」になりえるだろうか。 ⑦抽選制は、議会に市民の感覚や意見を反映させることにつながると思うか。 ⑧抽選で選ばれた議員は、自らの良心に従って適切な判断ができるだろうか。そのために必要なことはあるか。 ⑨抽選制の導入で、「良識の府」の名にふさわしい議会に近づくとと思うか。

問いは、レベル1→レベル2→レベル3の順で選びましょう。前時にそれぞれが考えたポイントを深められる問いや、議論の流れをふまえてグループの議論を進展させる問いを選びましょう。

レベル3の問いも、前時のテキストや配られた資料の内容を活用して考えましょう。

(X教諭が作成したワークシートを筆者が抜粋し作成)

第四に、セミナーの実施である。セミナーの最初には、メンバーがどのような意見を持って参加しているのかを知るために、現段階の意見の共有と、レベル1：テキスト内の語句の意味を再確認する問いに関する意見交換を行った。その後、レベル2：テキストや他の資料を利用しながら主題についての理解を深める問いと、レベル3：主題についての判断を迫る問いについて各10分間話し合った。最後にX教師は「参議院議員を抽選制で選ぶことで多様性のある議会をつくるという政治学者の提案についてどのように考えますか」という問いを再度投げかけ、最終的な意見を記入させた。最終的な意見としては、賛成20名（うち留保条件付き6名）、反対9名（うち留保条件付き1名）、どちらとも言えない5名となった。具体的にどのような話し合いが行われ、結果としてどのような意見形成を促したかについての詳細な分析は今後の研究課題としたい。

2. ソクラテス・セミナーを使うことの意義と留意点

ここまで、中学校公民的分野「参議院はくじ引きで」の授業事例から、ソクラテス・セミナーの展開と教師の指導について明らかにした。以下では、授業者であるX教諭と授業実践を振り返る中で見えてきた、社会科でソクラテス・セミナーを実践することの意義と留意点について示す。

X教諭がソクラテス・セミナーを活用することの意義として見出したのは大きく2点であった。

1点目は、「生徒が筋道を立てて話し合いを行うことができる」というものである。X教諭は、これまで教師が問いを投げかけ話し合う教師主導の議論や、あらかじめ用意した複数の資料を読み解くことで意見作ったりする学習を中心に行なっており、生徒同士の話し合いを活性化させることに苦手意識を感じていた。今回、チケットを活用して生徒の問いを集め、その上で話し合いを実施したことで、グループの話し合い活動がスムーズに進み、生徒の思考を止めることなく問題について生徒主導で考えることができたと感じていた。

2点目は、生徒の問いと教師の問いを調整してソクラテス・セミナーの問いを生み出す作業を複数回経験することで、「生徒が生み出す問いに質的な向上が見られた」ことである。第1回目（死刑制度の是非）の授業においては、チケットに書かれた生徒の疑問は、「どんなことをすると死刑になるのか」、「死刑制度があることで犯罪は減るのか」といった事実に関する質問がほとんどであった。しかし、3回目のセミナーでは、「本当に『良識の府』の名にふさわしい議会に近づくのか」といった、今回の話し合いの本質に迫る問いを生徒が設定できるようになっていた。この点を証明するには更なる検討が必要であるが、ソクラテス・セミナーを実施することで、生徒が話し合う問題の論点を自ら明らかにする力を養うことにつながる可能性があるのではないかと考えている。

一方で、3回の実践が全てうまくいったといえるわけではなく、ソクラテス・セミナーは実施ごとに修正が加えられた。この点をセミナーの留意点として示したい。X教諭が実践していく中で改善が必要と考え、修正を加えたのは「セミナーの目的や規範の確立」と、「問いの設定と提示」である。

「セミナーの目的や規範の確立」について、セミナーを始めた当初、生徒は相手を説得させたり、

グループで意見の合意を取り付けようしたりとする動きが見られた。X教諭はその都度ソクラテス・セミナーと他の議論（ディベートなど）との違いを強調し、ワークシートにもその点を付け加えたが、3回目を終えてもそのような傾向は依然として見られていた。X教諭は問題をより深く理解するための話し合いに向けて、セミナー自体を評価し、話し合いを改善する活動を取り入れたり、司会のやり方や役割を共有したりするなど、より多くの時間と指導が必要だったと感じていた。

次に「問いの設定と提示」について、X教諭はどのような問いを設定し、提示するかについて大幅な修正を行なった。問いの設定に関しては、価値的な問いばかりでは議論が空中戦となり、事実や解釈的な問いばかりでは話し合いが確認作業に終わり停滞することを踏まえ、両者のバランスに注意することが重要であると感じていた。また、当初は教師が問いを順序立てて設定し、話し合いをコントロールしようとしたが、3回目には生徒が問いをリストから選ぶことに変更している。教師が話し合いの方向を定め質の高い議論にしたいという思いと、生徒主体の話し合いをしたいという生徒の思いを調整することで活発なセミナーを促していた。

V 本研究の意義と課題

本研究は、生徒が論争問題を協働的に解釈し、考えを深めるための指導法の一つとして、社会科におけるソクラテス・セミナーの活用を提案し、その意義と方法について米国の研究成果や授業実践を通して明らかにするものであった。本研究の意義としては、2点挙げることができる。

第一に、議論を促す効果的な指導法として米国の社会科教育で広く普及するソクラテス・セミナーについて、その目的や実践的な指導法について示すことができた点である。ソクラテス・セミナーは、米国の論争問題学習研究において頻繁に登場する授業方法であり、日本においても一部検討が進められてきた（パーカー, 2004）。しかしながら、それらの研究は議論の形式の一部としてセミナーが示されているのみであり、その授業構成や教師の指導方法などについては明らかにならなかった。本研究では、そのような課題を踏まえて、ソクラテス・セミナーの手順や指導のポイントについて米国の複数の研究から明らかにすることとした。これにより、社会科における「ソクラテス・セミナー」を活用した授業がどのようなものであるか理解するための基準を示すことができたと考えている。また、本研究で明らかにした指導の手順やポイントは、実際に社会科の授業においてソクラテス・セミナーを実践しようとする際の実践的なアドバイスとなるだろう。

第二に、ソクラテス・セミナーを中学校公民的分野の授業において活用することで、この教育方法が持つ利点や課題について明らかにすることができた点である。本研究では、中学校第3学年の政治単元において「参議院議員はくじ引きで」をテーマにしたソクラテス・セミナーを実施し、良いセミナーを促すためにX教諭が行った指導をワークシートやインタビューをもとに明らかにした。複数回の授業実践と改善を踏まえてX教諭が感じた課題や留意点は、セミナーを実施する教師が共通して直面する課題とも言えるそうである。ソクラテス・セミナーを実践しようとする教師に

として X 教諭の指導法や留意点は大きい参考になるだろう。本研究の資料やワークシート、授業展開を活用して、ソクラテス・セミナーにぜひチャレンジしていただきたい。

しかしながら、本研究の課題としては 2 点指摘できる。1 点目は、今回授業実践を行ったソクラテス・セミナーは、一般的に実践されている形式とは異なるアプローチをとったことである。今回の授業実践ではセミナーを実践する X 教諭との協議の結果、議論慣れしていない教師や生徒の状況を踏まえ、教室全体ではなく小グループのセミナーを実施することとした。また、授業展開ではセミナーのまとめを実施しておらず、セミナーをどのように評価・改善していくのかという側面が省かれている。今後、別の形式でソクラテス・セミナーを実践することやどのような評価活動を取り入れることができるのか検討することが必要であろう。2 点目は、ソクラテス・セミナーが他の議論の形式とどのように異なり、学習活動や意見形成にどのような効果と制約を生むのか分析ができていない点である。この点に関しても、今後セミナーを活用した実践を行い、話し合い場面や教師の指導に着目して分析することで、セミナーの効果的な活用について検討したいと考えている。

参考文献

- 宇野重規 (2018) 『未来をはじめ：「人と一緒にいること」の政治学』 東京大学出版会, pp.2-59.
- 尾原康光 (1991) 「社会科授業における価値判断の指導について」 全国社会科教育学会『社会科研究』 39 巻, pp. 70-83.
- 尾原康光 (1992) 「社会科における批判的思考育成の原理と方法：「議論」に基づく O' Relily の批判的思考育成原理」 日本社会科教育学会『社会科教育研究』 67 号, pp. 35-52.
- 川口広美、奥村尚、玉井慎也 (2020) 『『論争問題学習』はどのように論じられてきたか：社会科教育学の関連論文の検討を基にして』『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 教育学研究』 第 1 号, pp. 40-49.
- 桑原敏典・岩崎圭祐 (2021) 「選挙に対する見方・考え方の育成を目指した中学校社会科授業開発研究-国民としての義務感に訴える主権者教育からの脱却を目指して-」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』 第 178 号, pp.13-22.
- ヘス,D,E.(2021) 『教室における政治的中立性：論争問題を扱うために』 春風社
- ロススタイン,D.,サンタナ,L. (2015) 『たった一つを変えるだけ：クラスも教師も自立する「質問づくり」』 新評論
- オリバー,D,W.,シェーバー,J,P. (2019) 『ハーバード法理学アプローチ：高校生に論争問題を教える』 東信堂
- パーカー,W.C (2004) 「社会科の核に基づく討論授業」 溝上泰編『社会科教育実践学の構築：新しい時代に生きる教師のための基礎基本』 明治図書, pp.358-373.
- 松田義幸・江藤裕之・須賀由紀子 (1999) 『グレート・ブックスとの対話 (ダイアログ)：「学習社会」の理想に向けて』 かながわ学術研究交流財団, pp.31-73.

- 文部科学省 (2020) 「主権者教育 (政治的教養の教育) に関する実施状況調査の結果について」
(https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2020/mext_00171.html)(最終閲覧日: 2022年11月2日)
- 吉田純太郎 (2022) 「教師が論争問題の指導を避ける要因は何か-九州・中四国地方の公民科教師を対象とした統計的事例研究-」 全国社会科教育学会 『社会科研究』 第96号, pp.13-24.
- 吉田徹 (2021) 『くじ引き民主主義-政治にイノベーションを起こす-』 光文社
- 渡部竜也 (2022) 「ハーバード法理学アプローチの理論と実践-教室での公的論争問題の立憲主義的な議論のために-」 令和2年度~4年度科学研究費助成事業基盤研究(C) (一般)研究成果報告書
- Beck, T.A. (2022). Supporting Civic Discussions With Younger Learner Students.
Jane, C., Lo. (Eds.), *Making Classroom Discussions Work: Methods for Quality Dialogue in the Social Studies*. Teachers College Press. pp.44-62.
- Gray, D. (1989). Putting minds to work. *American Educator*, 13(3), p.18.
- Kohlmeier, J. (2021). Ethical Reasoning and Risk-Taking When Teaching Patriotism and War. A Response to “The Foot and the Flag: Patriotism, Place, and the Teaching of War in a Military Town”. *Democracy and Education*, 29 (1), Article 5.
- Kohlmeier, J. Socratic Seminar: Learning With and From Each Other While Interpreting Complex Text. Jane, C., Lo. (Eds.), *Making Classroom Discussions Work: Methods for Quality Dialogue in the Social Studies*. Teachers College Press. pp.215-228.
- Larson, B.E. (2017) *Instructional Strategy for Middle and High school Social Studies: Methods, Assessment, and Classroom Management*. Routledge. pp.163-166.
- McAvoy, P., & Lowery, A. (2022) Structure Matters: Comparing Deliberation and Debate.
Jane, C., Lo. (Eds.), *Making Classroom Discussions Work: Methods for Quality Dialogue in the Social Studies*. Teachers College Press. pp.63-72
- Pace, J.L. (2019) *Hard Questions: Learning to Teach Controversial Issues*. Rowman & Littlefield. p.171.
- Parker, W.C. (2003) *Teaching Democracy: Unity and Diversity in Public Life*. Teachers College Press. pp.125-149.
- Parker, W.C. (2018) Projects as the Spine of the Course : Design for Deeper Learning., *Social Education*. 82(1), pp. 45-48.
- Schmidt, J., Pinkney, N. (2022) *Civil Discourse : Classroom Conversations for Stronger Communities*. Corwin. pp.125-143.

【付記】

本研究はJSPS 科研費 JP22K20250 の助成を受けたものです。

巻末資料1「参院議員はくじ引きで『多様性ある国会への切り札』：政治学者の提案」

古代ギリシャでは「抽選＝民主的」

—なぜ、くじ引きに？

「現代の民主主義が機能不全を起こしているのは、人々が『選挙原理主義』に陥っているためだと思うからです。民主主義の方法は選挙ではありません。歴史を振り返れば、古代ギリシャでは実際にくじ引きが使われていました。抽選制が民主的であり選挙制は貴族的であると考えられていたのです」

「今、世界の先端的な政治学では、抽選制議会の構想が真剣に検討され始めています。選挙制こそが民主的であるという近代以降の発想を見直すことで、民主主義の潜在的な力を再生させる試みです。既存の議会に抽選制の市民会議を付設する改革は、ベルギー内のドイツ語共同体やフランスの首都パリ市で実際に起きてもいます」

—選挙ではなく「くじ引き」で選ばれた議員にも代表としての正統性が宿るとしたら、その理由は何でしょう。

「目的と手続きという二つの観点から考えてみましょう。まず選挙制については、市民の意思を政治に反映させるという目的が妥当であり、投票・集計という手続きも公平であるために、正統性を有していると考えられているように思います」

「同じように抽選制は、市民の感覚や様々な属性を政治に反映させるという目的が妥当であり、無作為抽出という手続きも公平であるために、正統性を有していると考えられるのではないのでしょうか」

「社会の縮図」に法案拒否の権限を」

—くじ引きの導入で参院はどう変わるのでしょう。

「『良識の府』の何ふさわしい議会に近づくとと思います。参院議員の多くは特定の利益集団を支持母体とし、政党の党議拘束に縛られます。議員構成が『良識の府』の名にふさわしい議会に近づくとと思います。参院議員の多くは特定の利益集団を支持母体とし、政党の党議拘束に縛られます。議員構成が特定の人々に偏っているうえに、しがらみも多いのです。抽選で選ばれた議員は、多種多様な人々からなるうえ、しがらみがないため自らの良心に従って判断できます。次の選挙で公認してもらうために政党執行部に忖度（そんたく）する必要もありません」

—市民院は具体的にどのような役割を持つのですか。

「市民院の持つ権限は、今の参院より狭く限定した方がいいでしょう。衆院を通った法案への拒否権の行使を、主な権限にすればいいと思います。無作為抽出の市民院は社会の縮図です。衆院で法案の審議が尽くされたか、衆院の決定が市民感覚に著しく反していないかを判断し、必要なら拒否権を行使するのです。拒否権だけでなく、衆院や内閣に立法をするよう勧告する権限も持たせてよいかもしれません」

「衆院での審議もより真剣勝負になるでしょう。市民院議員を説得できなければ法案を成立させられな

くなるからです。今は『どうせ多数決で決まるのだから国会での議論は意味がない』と思っている政治家も、人々に届く言葉で政策を語り出すはずです」

—プロの政治家でない人々に任せて大丈夫でしょうか。

今の議員が専門家であるかどうかを疑ったほうがいいと私は思います。『弁が立つ』という程度の専門性はあるでしょうが、社会の現場を知っているかどうかは疑問だからです」

「数百人という規模で集まった市民集団の方が、より専門家ではないでしょうか。そこには農業に詳しい人も金融に詳しい人も、家事や子育てや医療に詳しい人もいます」

「女性議員も増えます。参院議員の多くはいまだに中高年の高学歴男性で、そのことが社会の刷新を妨げていますが、くじ引きは多様性のある国会を作る切り札になります」

—仕事や家事などを背負っている市民が国会議員の任務まで果たせるでしょうか。

「議員の負担を注意深く制度設計すれば、現役世代でも参加できると思います。オンラインをうまく活用すれば、さらに負担軽減できるでしょう」

—衆院については選挙制のままとする構想なのですね。

「はい。私は抽選制が万能だとは思っていません。例えば選挙制は抽選制よりも、有識者が議員を統制しやすい仕組みであり、能力のある政治家を選びやすい仕組みでもあります。政党にも、政策の対立軸を明示するなどの固有の役割があります。抽選制は女性や貧困層の人々が議員になる道を開く点では実質的な平等へ道を開く制度ですが、抽選から漏れた市民から政治参加の機会を奪う面もあります。衆院を選挙制のままにしておこうとするゆえんです」

「第二院と呼ばれる参院は従来、存在意義を厳しく問われてもきました。『第一院と一致した判断をするなら無用、反対するなら有害』との批判です。抽選制の市民院にすれば、そのジレンマは解消できるでしょう。一致すれば市民感覚のお墨付きが得られたことになり、一致しなければ市民感覚を反映できたことになる。一致しても反対しても有益とみなせるのです」

（「参院議員はくじ引きで『多様性ある国会への切り札』：政治学者の提案」, 朝日新聞デジタル, 2022-07-01, <https://www.asahi.com/articles/ASQ6X3QTYQ6RULZU005.html> (最終閲覧日 2022-11-10) より前半部分を転載)